〈社会〉

社会的事象を思考・判断し、表現する力を養う授業づくり

――問いの工夫と社会参加を意識したパフォーマンス課題を通して（高等部第２学年）――

沖縄県立はなさき支援学校教諭　前　泊　大　志

Ⅰ　テーマ設定の理由

情報化やグローバル化が進展し、変化の先行きを見通すことが難しい時代の中で、選挙権年齢及び成年年齢が 18 歳に引き下げられ、高校生にとって政治や社会が一層身近なものとなっている。『特別支援学校高等部学習指導要領（平成 31 年告示）解説 知的障害者教科編（上）高等部』（以下『特支解説知的編（上）』）においても、知的障害のある生徒の教育的対応として「望ましい社会参加を目指し，日常生活や社会生活に生きて働く知識及び技能，習慣や学びに向かう力が身に付くよう指導する。」ことが示され、また、高等部の社会科では「社会的事象の特色や相互の関連，意味を多角的に考えたり，自分の生活と結び付けて考えたり，社会への関わり方を選択・判断したりする力，考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う。」ことが示されている。

現任校は、知的障害を主とする特別支援学校で、学校の教育目標の１つに「自立、社会参加・貢献」を掲げている。今回の対象は、高等部２学年の男子生徒８名の学習グループである。８名中７名が地域の中学校から本校高等部に入学し、これまでの生育歴や成功体験の少なさから自信が持てず、自分の思いや考えを表出することに消極的な生徒が多い。社会科の授業においても、間違えることや失敗することを恐れるあまり、正答を知りたがる傾向にあり、「なぜそう考えたのか」などの質問には答えに詰まり、深く考えずに返答することがある。

私自身の授業を振り返ってみると、発問やワークシートで比較的簡単な用語や語句を答えさせ、それに正答することで生徒に自信を持たせることをねらいに授業を進めてきた。その結果、アンケートでは社会科の印象を「楽しい」「役に立つ」「もっと知りたい」など前向きな気持ちで肯定的にとらえている生徒が多い。しかし、そのような授業展開は知識中心となり、学習したことを自分の生活と結び付けて考えさせる手立てが弱く、その場限りの知識で終わっていた。このことから、授業での学びを今後の社会生活に生かすため、学んだ知識を用いて社会的事象を思考・判断し、自分の考えをもって表現する力の育成が必要と考える。

そこで本研究では、授業での学びを社会参加につなげるためにも、様々な知識やスキルを総合して使いこなすパフォーマンス課題を設定した単元計画を立て、単元を通して各時間考える視点を与えていく。具体的には、内容項目『産業と生活』において、単元を「我が国の食料生産とわたしたちの生活」と設定し、我が国の食料生産に関わる学習の導入で、生徒に社会参加を意識したパフォーマンス課題を提示する。その解決のために「問い（毎時間の学習課題や教師の発問等）」の工夫を行い、生徒が「社会的な見方・考え方」を働かせて生産物の種類や分布、生産量の変化、価格や費用などに着目し、自分の生活と結び付けて考えることで社会参加を意識することにつなげていく。そのような授業づくりを通して、生徒が自信を持って「なぜなら、～と考えたからです」と理由や根拠を示し、思考・判断したことを表現する力が養われるであろうと考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

高等部社会の内容項目『産業と生活』の単元「我が国の食料生産とわたしたちの生活」において、問いの工夫と、社会参加を意識したパフォーマンス課題を設定することにより、社会的事象を思考・判断し、表現する力が養われるであろう。

Ⅱ　研究内容

1　社会的事象を思考・判断し、表現する力の育成について

(1) 社会的事象を思考・判断し、表現する力とは

『特別支援学校高等部学習指導要領』の社会科１段階の目標イでは、「社会的事象の特色や相互の関連，意味を多角的に考える力，自分の生活と結び付けて考える力，社会への関わり方を選択・判断する力，考えたことや選択・判断したことを表現する力を養う。」とし、思考力・判断力・表現力等の育成が示されている。さらに、「表現する力」については、『特支解説知的編（上)』に、「社会的事象を知識として得るだけではなく，その社会的事象が我が国の社会生活とどのように関わっているのかについて，複数の立場や意見を踏まえて，自分が考えたことを説明したり，話し合ったりする力のこと」と示されており、これは他者の意見を踏まえ、自分の生活と結び付けて考えを深め、表現することの必要性を示している。

また、澤井陽介（2017）は、思考力・判断力・表現力等の育成について、「事実（情報）を基にして比較・関連付けたり総合したりしながら、社会的事象の特色や意味を考察する方向へ向かう、立場や根拠、理由付けを明確にして自分の考えを説明する方向へ向かう、そんな『対話的な学び』を仕かけることが大切」と述べている。これは、生徒に思考・判断させて表現力を育成する際の教師の手立てと言える。

そこで本研究では、社会的事象を思考・判断し、表現する力を、社会的事象の特色や意味などについて事実（情報）をもとに、複数の立場や意見を比較・関連付けるなどして多角的に思考・判断し、自分の考えを伝える力と捉えて研究を進めていく。我が国の食料生産に関するパフォーマンス課題を提示し、単元を通してその課題解決を図ることで社会参加の意識につなげる。そのためには、毎時間学習課題を設定し、我が国の食料生産が国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることなど、社会的事象の特色や意味について、消費者や生産者といった様々な立場や視点をもって考えられるようにする。そして、自分自身の生活と結び付けて捉えたり、他者の意見を聞いたりするなどして考えを深め、学習課題のまとめや単元シートを記入していく。そのことが日々社会的事象を思考・判断し、表現する力を養い、パフォーマンス課題の解決につなげることで、その育成がより深まると考える。

(2) 問いの工夫と社会的な見方・考え方について

澤井は思考・判断し、表現する力を養うためには「既有の知識・技能を活用し見方・考え方を働かせる必要がある」として、社会科における見方・考え方を「時期や時間の経過、位置や空間の広がり、事象や人々の相互関係に着目して、比較・分類したり地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること」と述べている。さらに、「社会科では、『時間』『空間』『相互関係』といった、問いを立てる際に大事になる『視点』(見方）とその視点のもとにまとめる『思考』(考え方）がある」としている。

本研究では澤井（2017）を基に図１を作成し、生徒が社会的な見方･考え方を働かせる授業づくりを行う。各授業で考える視点として､「どこでどのようなものが生産されているのか」や「生産量はどのように変化しているのか」などの学習課題の設定や発問、ワークシートの作成を行う。そのことにより、生徒が「分布」や「変化」などの視点を持ち、思考を活性化させ、パフォーマンス課題を多角的に考えることにつなげる。そのような取り組みを継続することで、自分が考えたことや判断したことを表現する力を育成していく。

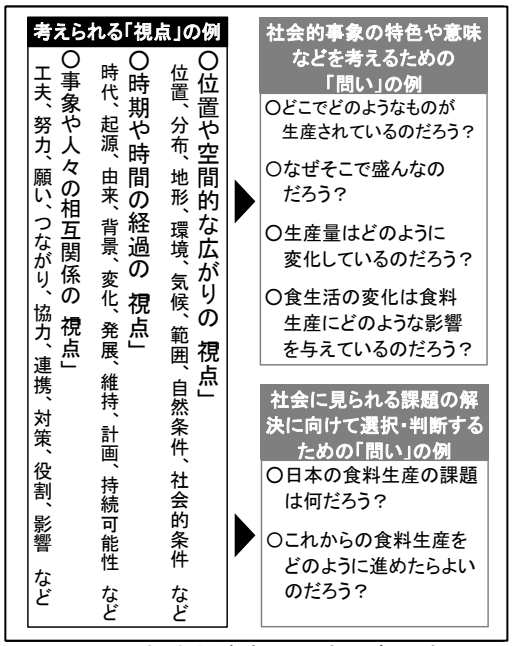

図１　社会的事象の見方・考え方
（澤井(2017)を基に作成）

２　特別支援学校における社会参加について

『新版 社会科教育事典』(2012) によると、社会参加とは「社会の一員としてその社会で問題となっている事柄に関心をもち，その解決に向けて何らかの態度を示したり，行動を起こしたりすること」と示されている。

また、『特支解説知的編（上)』では、「特別支援学校における教育については，キャリア教育の視点で学校と社会の接続を目指す中で実施されるものである。」と示されており、現任校でも作業学習の時間を中心に、学校生活全体において卒業後の社会参加を意識した指導が行われている。

それにつなげるため、本研究では生徒が社会の問題に関心を持ち、その解決に向けて自分の生活と結び付けて考えることで「社会参加を意識」できるような授業づくりを行う。研究の対象である高等部２学年の生徒たちは、今年度の産業現場等における実習で、全員が学校外の事業所等での実習を行い、就労生活を体験することができた。実習を通して、卒業後の就労生活に意欲的になっている生徒も見られ、社会参加に向けた指導はますます大切になっている。

本研究では、「自分が食べている食料はどのように生産されているのか」、「価格はどのように決まるのか」など、食料生産と自分の生活との結び付きを意識できるような学習課題を設定する。生活と結び付いた課題を生徒が様々な資料を用いて調べ、分かったことや考えたことをまとめ、表現できるようにする。その際、生徒に社会参加を意識させる手立てとして、単元を通したパフォーマンス課題を設定し、社会的事象を自分事と捉えて考えられるようにする。

３　パフォーマンス課題について

(1) 社会的事象を思考・判断し、表現する力との関連性

西岡加名恵（2018）は、「パフォーマンス課題とは，子どもが様々なスキルを総合して使いこなすことを求める課題」とし、パフォーマンス課題を取り入れることで、教師は生徒がどのくらい深く思考・判断し、表現できるようになっているのかを把握できるとしている。

そこで本研究では、生徒の社会的事象を思考・判断し、表現する力を見とる手立てとして、生徒にとって身近で社会参加を意識できるパフォーマンス課題を設定し、単元を通し生徒が自分の生活と結び付けて考えられるようにする。具体的には、単元「我が国の食料生産とわたしたちの生活」において、パフォーマンス課題を「あなたが農業の作業学習で収穫した野菜が給食で出ることになりました。しかし、学級の友達はそれをほとんど食べることなく残してしまいました。あなたはその友達に食べ物の大切さをどのように伝えますか。その理由も示して伝えてください」とし、食べ物の大切さを友達に伝える場面を想定する。

パフォーマンス課題を単元を通して意識させ、単元の導入時とまとめの時間にそれに対する自分の考えと、その理由を単元シートに記入させる。特にまとめの際、産地や価格、外国との関わりや生産者の立場など、単元を通して学んだ知識やスキルを用いて食料生産と自分の生活を結び付けて表現できるようにする。このことで、単元を自分事として考え、社会参加の意識をもって社会的事象を思考・判断し、表現する力の育成につなげる。

(2) ルーブリックについて

パフォーマンス課題で社会的事象を思考・判断し、表現する力を評価するには、評価の指標となるルーブリック（評価基準表）を考える必要がある。本研究でも表１のようにルーブリックを作成し、生徒の記述を見とっていく。

表１　本単元のパフォーマンス課題におけるルーブリック（基本型）

レベル	記述語
A	食料の生産量や消費量の変化、輸入など外国との関わり、食料生産に関わる人々の工夫や努力などに着目して、食料生産が国民生活に果たす役割を多角的に考え、自分の生活と結び付けて理由や根拠を示し表現している。
B	食料の生産量や消費量の変化、輸入など外国との関わり、食料生産に関わる人々の工夫や努力などに着目して、食料生産が国民生活に果たす役割を考え、自分の生活と結び付けて理由や根拠を示し表現している。
C	食料の生産量や消費量の変化、輸入など外国との関わり、食料生産に関わる人々の工夫や努力などに着目して、食料生産が国民生活に果たす役割を考え、自分の生活と結び付けて表現している。

なお、現任校においては、同じ学習グループ内でも特性が多様であるため、ルーブリックだけでは、子どもの学びを適切に捉えることが難しい。市川和也（2018）は「特別なニーズのある子どもに対しては個別の学習目標を立てることが有効（中略）こうした工夫によって，各自の目標に照らし合わせることで特別なニーズのある子どもの学習の歩みを評価する」としている。本研究においても、表１のルーブリックに加え、生徒の特性に合わせて、授業内での発表や発言、単元シートの記述など多様な見とり方を用いた評価を記述で行う。

Ⅲ　指導の実際

１　単元名　「我が国の食料生産とわたしたちの生活」

２　単元の目標

我が国の食料生産について、農産物の種類や分布、生産量の変化、外国との関わりなどに着目することで、食料生産と国民生活を関連付けて考え、食料生産は国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることを理解するとともに、既習事項を総合し食料生産の課題について自分の生活と関連させ、考えたことや判断したことを理由や根拠を示して表現することができる。

３　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①生産物の種類や分布、生産量の変化、輸入などについて各種資料を活用し、我が国の食料生産の概要を理解している。 ②我が国の食料生産は自然条件を生かして営まれていることや、国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることを理解している。	①生産物の種類や分布、生産量の変化、輸入など外国との関わりなどに着目して我が国の食料生産の様子について考え、表現している。 ②その地域で食料生産が盛んな理由や食料生産の変化の特徴を考え、根拠を示して表現している。	①我が国における食料生産について、主体的に学習問題を追究しようとしている。 ②学習したことをもとに、我が国の食料生産の様子に関心を高めている。

４　指導計画と評価計画（全８時間）

時	過程	学習課題（視点）、→見方・考え方、○学習内容等	資料、→留意点、【評価の観点】
1	つかむ	わたしたちが食べている食料はどこで作られ、なぜそこで生産が盛んなのか。（自然条件、地形、分布） →農産物の生産が盛んな地域の地理的な広がりに着目する。 ○白地図にまとめ、気候や地形との関連に気付く。 ○パフォーマンス課題を提示し、次回以降につなげる。	給食の写真と献立表、白地図 →様々な種類の食材が使われていることをおさえる。 →資料などを使って気候や地形に着目できるようにする。【思・態】
2	調べる	なぜ日本では稲作が寒い地域で盛んなのか。（工夫、努力） →農家の人々の生産性を高める工夫から考える。 ○米づくりにどのように自然が生かされているのかを読み取る。 ○米づくりが盛んな地域の人々の工夫や努力について調べまとめる。	都道府県別生産量 →農家の人々が、生産性を高めるために機械化や耕地整理など工夫や努力をしてきたことを理解できるようにする。【知・思】
3・4	調べる	食生活の変化は食料生産にどのような影響を与えているのか。（変化、影響） →年代や消費量、生産量の変化に着目する。 ○食生活の変化や消費量、生産量の変化について資料から調べる。	昔の食事と現代の食事、 食料の消費量と生産量の変化 →食生活の変化を自分の生活と結び付けて考えられるようにする。【思】
5	調べる	外国から食料を輸入することで日本の食料生産はどうなったか。（背景、対策） →身のまわりに低価格の輸入品が多いことに気付く。 ○スーパーのチラシなどに表示されている産地を調べて白地図にまとめたり、国産品と輸入品の価格を比較したりする。	スーパーのチラシ、輸出入量 食料自給率の推移 →外国で生産されている食料も、わたしたちの食生活を支えていることを捉えられるようにする。【知・思】
6	調べる	食料はどのように運ばれ、価格はどのように決まるか。（連携、役割） →輸送の働きや、流通・販売の費用との関連性に着目する。 ○農産物が収穫された後の行き先を調べてまとめたり、生産費や輸送費の関連性を考えたりする。	価格の内訳、地図（日本・世界） →消費地に届けるための運輸の役割や、食料生産には多くの費用がかかることを理解できるようにする。【知・思】
7	まとめる	食料を安定して確保し続けるため、日本の食料生産の課題は何か。（継承、発展） →食料自給率や産業別人口割合の変化などに着目する。 ○産業別人口の変化など、食料の安定確保の課題を話し合う。	産業別人口割合の変化のグラフ →食料自給率を上げることの大切さを捉えて、既習事項と関連付けるようにする。 【思・態】
8	まとめる	「食べ物の大切さをどのように伝えるか」（願い、持続可能性） →これまで調べたことを自分の生活と関連付けて考える。 ○パフォーマンス課題に取り組み、発表する。	これまでの学習成果　など →学習を総合して日本の食料生産についてまとめられるようにする。【思・態】

５　**本時の指導**　「食生活の変化と食料生産への影響」（３/８時間）

(1) ねらい

我が国の昔と現代の食事の変化と、主な食料の消費量や生産量の変化を関連付けて考え、表現することができる。

(2) 本時の評価

評価の観点	社会的な思考・判断・表現
評価規準	我が国の昔と現代の食事の変化と、主な食料の消費量や生産量の変化を関連付けて考え、表現している。
評価方法	授業内：資料の読み取り、発言、話し合いの様子　　授業後：ワークシート・単元シートの記述

(3) 展開

過程	学習活動・内容・発問等	生徒の反応等	留意点
導入	○課題把握（グループ→全） ①「和食と洋食の食材の違いは何か」 和食と洋食の写真を比較して、特徴や違いを話し合う。→それぞれでよく使用されている食材の違いをおさえ、次のグラフの読み取りにつなげる。	和食：主食は米、魚料理がある、肉がない、野菜が多い　など 洋食：肉がある、ご飯の代わりにパン、野菜が少ない　など	2～3名のグループを作る。話し合いが進まない場合は、和食と洋食の担当生徒を決め、お互いの考えを共有させる。
展開	○学習課題の設定と見通し（個） 「食生活の変化は食料生産にどのような影響を与えているのか」の予想をたてる。 ○知識の獲得（グループ） ②「主な食料の日本での消費量と生産量はどのように変化しているか」 主な食料の消費量と生産量の変化のグラフを見て、米、肉類、牛乳・乳製品、魚・貝類にあてはまるものを話し合って選び、その理由を記入する。	自分の食生活も意識しながら、ワークシートの予想欄に記入する。 消費量のグラフ ・大きく減っているので米かな？ ・大きく増えているので肉類かな？ 生産量のグラフ ・減ってきているので米かな？ ・たくさん増えているので肉類かな？ 2つのグラフから分かること ・2つのグラフは同じように変化している	自分の食生活も意識させながら提示する。 消費量のグラフでは肉類と牛乳・乳製品を間違える場合は、グラフの横軸の単位に着目できるようにする。 生産量の変化のグラフは、次時の学習（輸入）とも関連付けていく。
まとめ	○課題の解決、まとめ（個→全体） 「食生活の変化は、食料生産にどのような影響を与えているのか」のまとめを、キーワードを使って表現する。	・私たちの食生活は洋食も食べるように変化し、和食で使う米や魚の消費量と生産量は減り、洋食で使う肉類や乳製品の消費量と生産量は増えている。	食の欧米化の進展が生産量の変化として影響してくることを考え、記述できるようにする。

Ⅳ　仮説の検証

研究仮説に基づき、問いの工夫と社会参加を意識したパフォーマンス課題を設定することにより、社会的事象を思考・判断し、表現する力が養われたかを検証する。検証方法として、授業中の生徒の様子や発言、単元シート等の記述内容、検証授業後のアンケートから分析や考察を行う。

１　各時間における社会的事象を思考・判断し、表現する力の育成

(1) 問いの工夫で社会的な見方・考え方を働かせることができたか

社会的事象を思考・判断し、表現する力を育成するため、各授業で学習課題を設定し、使用するワークシートの中に統計資料や図等を載せ、生徒が社会的見方・考え方を働かせる工夫を行った。授業では「なぜそう考えたのか」の発問を繰り返し行ったり、「それを選んだ理由」を書かせたりするなどし、社会的な見方・考え方を働かせて表現できるようにした。

第３・４時では、学習課題を「食生活の変化は食料生産にどのような影響を与えているか」とし、単に現代の食生活を捉えさせるのではなく、その変化や影響など多角的な視点で日本の食料生産を捉えられるようにした。導入で和食と洋食の写真を用いることで、我が国の食生活が和食から洋食へと変化していることを意識させ、使用する食材が異なることをおさえた。それを踏まえて、主な食料の消費量と生産量の変化のグラフを読み取り、米・魚・肉類・乳製品のどれに当てはまるのかを思考し判断する学習を行った。その際「なぜそのように判断したのか」と理由や根拠を記述できるワークシートを作成した。

図２の生徒Ａの記述では、アの米は「むかしにくらべてたべる量がへっている」、イとウの肉類・乳製品は「昔はあまり無かったが最近はよく消費されている」旨の記述、エの魚は「むか

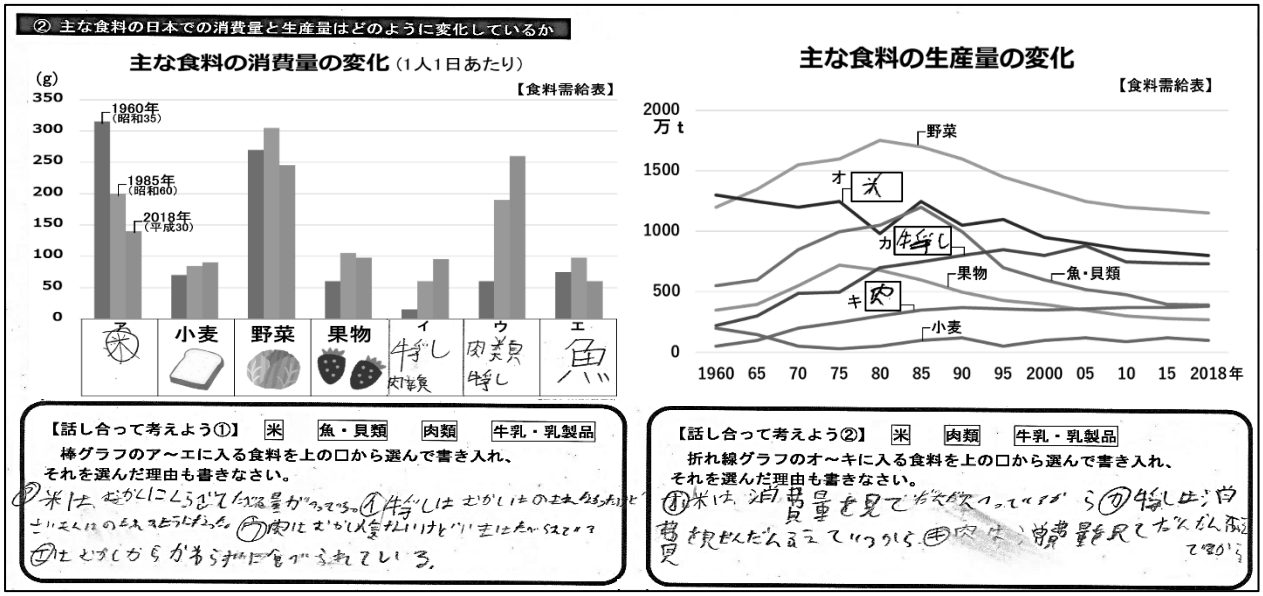

図２　生徒Ａのワークシートの記述（第３・４時）

しからかわらずに食べられている」とあり、生徒Ａが食生活の「変化」とその「影響」の視点をもって食材の消費量の変化を捉え、この２つの視点を根拠として判断した理由を表現していることが分かる。また、最初は肉類と乳製品を逆に答えていたが、教師の「左の棒グラフは何の変化を表したものか」の発問により、「（１日あたりの）消費量の変化だ」と発言し、グラフ縦軸の単位［ｇ］に着目でき、正解が逆であることに気付いた。その結果、生徒Ａは次の「主な食料の生産量の変化」の問題では、カの乳製品とキの肉類を正しく解答できた。

生徒Ｂは、グラフをどのように読み取って良いか分からず、なかなか記述できないでいた。しかし、生徒Ａとの話し合い活動によって「米は昔から食べられているから昔の量（消費量・生産量）は多いけど、最近は減っている」と発言して「変化」と「影響」の視点に気付いてグラフを読み取り、それを根拠として判断した理由を記述できるようになった（図３）。

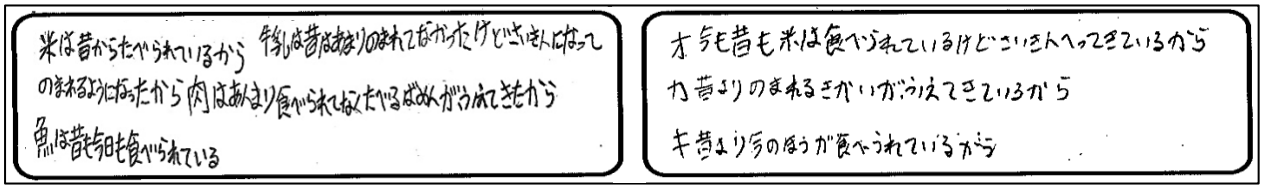

図３　生徒Ｂのワークシートの記述（第３・４回時）

このように、教師が問いを工夫し、それを解決するための様々な資料や話し合い活動を用いることで、生徒が社会的な見方・考え方を働かせることができた。

(2) 社会的事象を思考・判断し、表現することができたか

本研究では、社会的事象を思考・判断し、表現する力を、社会的事象の特色や意味などについて事実（情報）をもとに、複数の立場や意見を比較・関連付けるなどして多角的に思考・判断し、その理由や根拠を示して他者に伝えることができる力と捉えて進めてきた。

第１時では、「わたしたちが食べている食料はどこで作られ、なぜそこで生産が盛んなのか」と学習課題を設定した。図４は生徒Ｃと生徒Ｄの学習課題に対する授業はじめと終わりの記述である。生徒Ｃは、学習はじめの予想を「畑（で作られ）、育ちやすいから（生産が盛ん）」とした。生徒Ｄは、「土がき

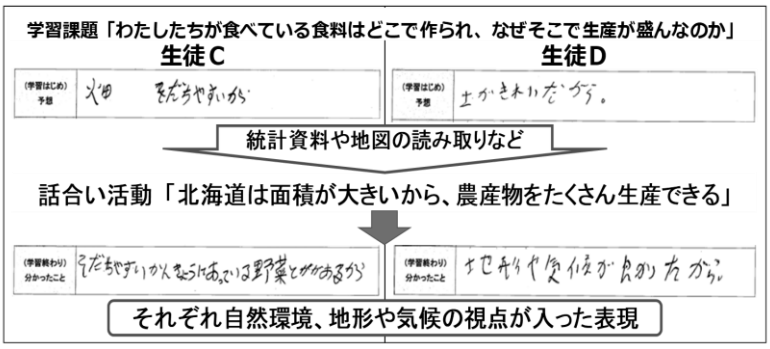

図４　生徒Ｃと生徒Ｄの学習課題の記述（第１時）

れいだから（生産が盛ん）」とのみ記入されていた。授業では、給食に使用されている食材の生産量上位の３都道府県を、統計資料等を活用して調べさせ、その中で生徒たちは「北海道の食料生産量が多い」ことに気付いた。その後、生徒Ｃと生徒Ｄが話し合いの中で統計資料や地図などを比較させ「北海道は面積が大きいから、農産物をたくさん生産できる」と考えた。また、生徒Ｃは米づくりの盛んな地域の分布にも着目し、米の生産地は平野で雪がよく降る地域であることにも気付いたため、授業の終わりでは「そだちやすいかんきょうにあっている野菜とかがあるから」と自然環境の視点が入った表現となった。生徒Ｄも、「地形や気候が良かったから」と地形や気候と関連付けるなど、２人は根拠を示して表現できるようになった。

第２時でも「なぜ日本では稲作が寒い地域で盛んなのか」の学習課題に対して、生徒Ｃが「稲作（稲）じたいがじょうぶだから」、生徒Ｄが「育てやすいから」という予想をたてた（図５）。話し合い活動を通して、稲作に関わる人々の工夫や努力の視点で思考し、学習終わりではそれぞれ「品種改良や土地改良の努力によって生産できるよ（う）になっている」、「気候や地形を生かしながら、農家の人々の工夫や努力で米づくりができる」との表現ができるようになった。生徒Ｃは「品種改良や土地改良」と工夫や努力の内容を具体的に表現しており、生徒Ｄは「気候や地形を生かしながら」と前時で学んだことも関連付けて表現している。

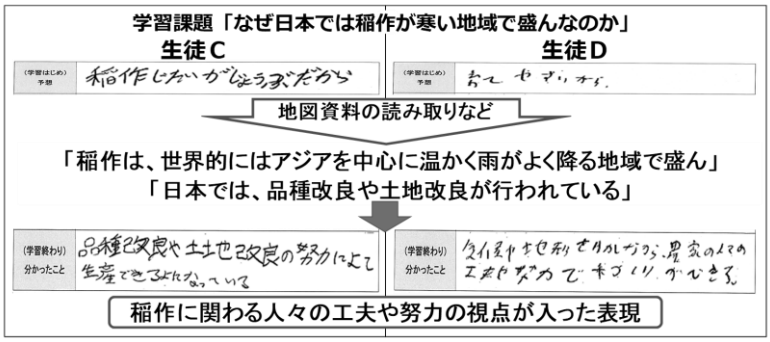

図５　生徒Ｃと生徒Ｄの学習課題の記述（第２時）

第５時では、学習課題を「外国から食料を輸入することで日本の食料生産はどうなったか」とし、食料自給率の課題について、食料輸入の長所や短所などと関連付けて考える授業を行った。まず、「食料自給率」の用語の意味をおさえ、第１時で取り上げた給食食材の自給率を予想した。

図６は生徒Ｃ・Ｅの予想とその理由である。生徒Ｃは、米と野菜は気候など既習事項と関連させて予想をたて、牛肉と大豆は生活体験をもとに予想をしていた。その後、統計資料などで自給率を調べた感想では、「大豆の輸入が多い」や「思ってたのよりひくいなど」予想と実際との開きや、日本の食料自給率の低さについての記述が見られた。それを踏まえて「日本の食料自給率を上げるため、自分にできることは何か」と発問し、話し合わせた。

生徒Ｃは、生徒Ｄとの話し合いで、「このまま自給率が下がり続けたら大変」や「そのためには、あまりやりたくないけど農業の仕事をすることも考える」などの意見を交わし、その後の自給率を上げるため自分にできることとして、生徒Ｃは「自分たちで食料を作って生産量を増やす」とワークシートに記述し、食料生産の課題を自分たちの進路とも関連付けて表現していた。

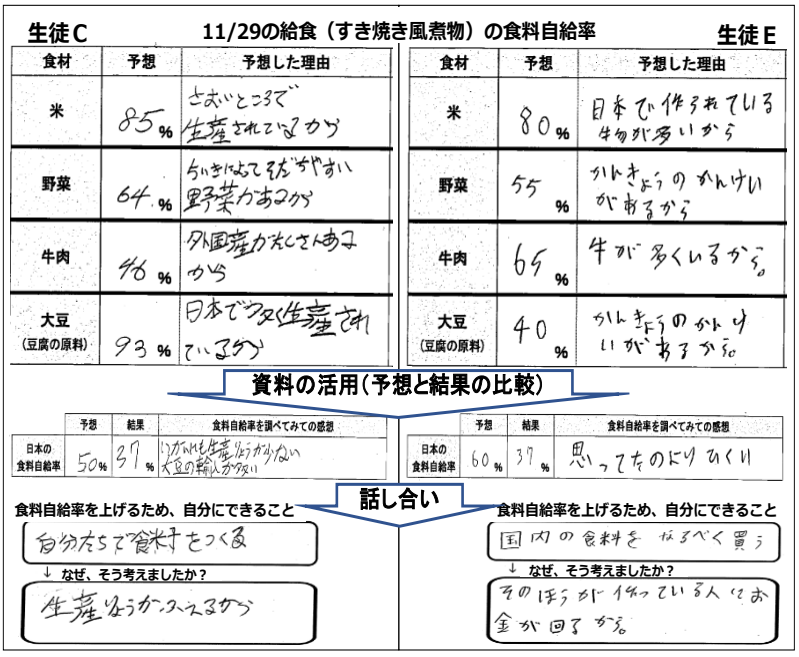

図６　生徒Ｃと生徒Ｅの食料自給率の予想とその理由など

生徒Ｅは、野菜と大豆の自給率予想で「かんきょうのかんけい」と本人なりの表現で食料生産と自然環境を関連付けて記述し、米と牛肉は生活経験をもとに予想をたてていた。生徒Ａ・Ｂとの話し合いでは、「なるべく輸入食品に頼らず、国内食品も食べる」などの意見が交わされた。その後、生徒Ｅの記述では「国内（産）の食料をなるべく買う。そのほうが作っている人にお金が回るから」と、自分の行動が生産者に及ぼす影響を関連付けて考え、生産者にも視点を向けながら自分の生活と結び付けた表現となっている。

これらをまとめると、各時間で問いの工夫と、見方・考え方を活用させ、話し合い活動などで多角的な視点をもって社会的事象を比較・関連付けて理由や根拠を考えることで、社会的事象を思考・判断し、表現できるようになったと言える。

２　社会参加を意識したパフォーマンス課題について

本研究では単元シート（図７）を作成した。生徒が単元シートを利用することで、各時間で身につけた社会的事象を思考・判断し、表現する力を関連付けたり、多角的に捉えたりしながら、パフォーマンス課題を考えることができる。また、教師は単元の冒頭にパフォーマンス課題を示して現段階での自分の考えを記入させ、単元終わりで再びそれについて記述させることで、社会的事象を思考・判断し、表現する力を見とることができる。

図７　単元シートの様式

(1)　パフォーマンス課題に対する記述の変化

表２はパフォーマンス課題に対する学習前と学習後の記述と、課題をまとめる際に影響したと考えられる各授業における単元シートの記述や発言を抜粋したものである。

生徒Ａの記述は、学習前の「けんこうかんりのため」から、「生産者の工夫・努力」（第２時）の視点や、「農業の継承・発展」（第７時）の視点をもって「農家の人が品種改良や土地改良などしてやさいをおいしく作っているのに」と根拠を示し、「のこすのはダメだと思うよ」という表現に変化している。

表２　パフォーマンス課題に対する記述の変化と各授業での主な記述等

パフォーマンス課題	「あなたが農業の作業学習で収穫した野菜が給食で出ることになりました。しかし、学級の友達はそれをほとんど食べることなく残してしまいました。あなたはその友達に食べ物の大切さをどのように伝えますか。」		
生徒	学習前	影響したと考えられる各授業での記述（○）や発言（●）（一部抜粋）	学習後
A	けんこうかんりのため	○ひんしゅかいりょうで米がさむいちいきでおいしくそだつことが分かった。（第2時） ○農業は若者がすくないから、地域ブランドを作ったりして若者にみりょくを広めようと取りくもうとしている。（第7時）	農家の人が品種改良や土地改良などしてやさいをおいしく作っているのにのこすのはダメだと思うよ。
B	農業の人が一から作ったから食べないともったいない	○米を育てるのもかんたんじゃなく努力や工夫が必要。（第2時） ●輸入食料だけじゃなく国内の食料も食べることが大事。（第5時） ○農業の人口をふやすために努力している。農業を盛んにするために地域ブランドや6次産業などいろんな取組をしている。（第7時）	農家の人がひんしゅかいりょうとか6次産業や地域ブランドをつくっていろんな工夫をしているから食べないともったいない。
C	たべましょう	○農家の努力が大切と思った。品種改良や土地改良がおこなわれていたから。（第2時） ●国内での（食料）生産が少ないと思った。外国に頼るんじゃなくて自分たちでやることが大切。（第5時） ○日本の農業が盛んになるように農家は努力している。農業を楽しくして若者にひろめている。（第7時）	食べ物の大切さをかんじよう。理由は、農家がくろうしてそだてているから。品種改良とか土地改良、あと地域ブランドとかを商品にしている。
D	食べ物がないと生きていけない	○消費量と生産量が昔と今で大きく変化してたので、未来はどうなっているのか気になる。（第4時） ●日本は食料自給率が減っているのは初めて分かった。（第5時） ○農家の人々を増やす大切さがわかった。農家の人が、またさらにへっていったら野菜が食べられない。（第7時）	野菜や食べ物を大切にしないと、将来食べ物がなくなったら一生食えなくなって死ぬんだよ。だから食べ物を残さず食べて大切さを知ろう。
E	食べさせる。理由　体に大切だから	○自分は、あたえられた米を全部食べる。努力している人がいるから。（第2時） ○多くの食品が外国から輸入されることによって日本の食料自給率が下がっている。あんまり外国にたよらないで自分達で作れる食料はなるべく作る。（第5時）	少しだけでも食べさせる。 理由　農家の人が地域の特産品を作ったりして大変な思いをしているから。

F	たべよう	○やさいをたべようとおもった。(第1時) ○じきゅうりつ 100%にしたほうがいいとおもった。(第5時)	おいしかったです
G	欠席のため記入なし	○たべるものはしっかりたべる。たべないとじょうぶになれない。(第3時) ●国内品を買わないと。海外から輸入しすぎない。(第5時) ○しぜんとむきあっていきながらの生活がへっているけど、なくさないためにがんばっているひとたちがいるのがわかった。(第7時)	野菜には、たくさんのえいようそがはいっていてバランスをととのえているから、かぜをひきにくくすることができる。
H	きみのけんこうをまもるため	○食べ物の大切さ(第1時) ●日本はそんなに食料はできていなかった(第5時)	欠席のため記入なし

生徒Ｂは、学習前から「農業の人が一から作ったから」と生産者の立場で記述していたが、学習後は「いろんな工夫をしている」と表現に変化が見られた。学習後の記述は、「米を育てるのもかんたんじゃなく努力や工夫が必要」（第２時）や、「農業を盛んにするために地域ブランドや６次産業などいろんな取組をしている」（第７時）など、既習事項を関連付けて生産者の工夫や努力の視点をより具体的に表現して根拠を述べていることがわかる。

生徒Ｃは、学習前「たべましょう」だけであったが、学習後は「食べ物の大切さをかんじよう。理由は、農家がくろうしてそだてているから」と表現に変化が見られた。「日本の食料生産量は減少傾向」（第５時）と、「食料生産に関わる人々は努力している」（第２時、第７時）を関連付けて課題を思考し、「生産量の変化」や「生産者の工夫や努力」の視点をもって食べ物の大切さを捉え、農家の苦労を根拠に表現している。

生徒Ｄは、食べ物の大切さを「将来食べ物がなくなったら…」という視点で伝える表現となった。これは、「消費量と生産量が今と昔で大きく変化してたので、未来はどうなっているのか気になる」（第４時）という変化・影響の視点と、「農家の人がまたさらにへっていったら野菜が食べられない」（第７時）という継承・発展の視点を関連付けて食べ物の大切さを考え、「だから食べ物を残さず食べて大切さを知ろう」と根拠を示して表現している。

生徒Ｅは、学習前「体に大切だから（何がなんでも）食べさせる」という表現であったが、学習を通して「(食料生産のために）努力している人がいる」（第２時、第７時）という視点をもつことによって「農家の人が（中略）大変な思いをしているから、少しだけでも（食べてみて)」と根拠や表現が変化する様子が見られた。

このことから、社会参加を意識したパフォーマンス課題を設定したことで、単元シートの既習事項を生かし系統だてて自分の生活と結び付けて考え、表現することができた。

(2) ルーブリックと生徒の特性を踏まえた評価

表３は生徒のパフォーマンス課題の授業後の記述を、ルーブリック（表１）に対応させたものである。Ａレベルは４人、Ｂレベルは１人、Ｃレベルは２人であった。しかし、現任校における評価は生徒の特性を踏まえたものとなり、表４は生徒Ｃ・Ｄ・Ｆ・Ｇの評価の記述である。

表３　生徒の記述とルーブリックレベルの対応

ルーブリックのレベル	当てはまる生徒
A	A、B、C、E
B	D
C	F、G

表４　生徒の特性を踏まえた評価

生徒	授業後の記述	表1のﾚﾍﾞﾙ	特性	特性を踏まえた評価
C	食べ物の大切さをかんじよう。理由は、農家がくろうしてそだてているから。品種改良とか土地改良、あと地域ブランドとかを商品にしている。	A ﾚﾍﾞﾙ	自分の思いや考えを表出したり、深く考えたりすることを避けたがる	「農家がくろうしてそだてている」と生産者の立場で考えることができ、食料生産に関わる人々の工夫や努力の内容を具体的に示して、自分の思いを表現できるようになった
D	野菜や食べ物を大切にしないと、将来食べ物がなくなったら一生食えなくなって死ぬんだよ。だから食べ物を残さず食べて大切さを知ろう。	B ﾚﾍﾞﾙ	話すことに比べて書くことが苦手	話し合い活動での「生産者の収入を高めて、働く人をふやす」など生産者の立場に立った発言に加え、単元シートに多角的な視点をもって考えを記述することができた
F	おいしかったです	C ﾚﾍﾞﾙ	思考したことを表記するのが苦手	学習のまとめに「やさいをたべようとおもった」や「じきゅうりつ 100%にしたほうがいいとおもった」などと記述し、考えたことを表現することができた
G	野菜には、たくさんのえいようそがはいっていてバランスをととのえているから、かぜをひきにくくすることができる。	C ﾚﾍﾞﾙ	他者の気持ちや相手の立場を考えることが苦手	「(食べ物を)なくさないためにがんばっているひとたちがいるのがわかった」と生産者の努力の視点も踏まえた表現ができるようになった

生徒Ｃは、食料生産が国民生活に果たす役割を生産者の工夫や努力、消費者としての自分の立場など多角的に考え、自分の生活と結び付けて理由や根拠が示されており、Ａレベルに値すると考える。普段は自分の思いや考えを表出したり、深く考えたりすることを避けたがる傾向にあったが、授業では「消費量と生産量を調べることが大切。なぜなら、今と昔では消費量と生産量がぜんぜんちがうから食生活にえいきょうがでるとおもった」と発言して、考えたことを表現できるようになったと評価することができる。

生徒Ｄは、話すことに比べて書くことが苦手な生徒である。そのため、パフォーマンス課題では生産者の立場で記述することはできなかった。しかし、単元シートには「努力しないと米作りができない」（第２時）や「農家の人を増やす大切さがわかった」（第７時）など生産者の視点が入った記述が見られ、学習を通して多角的な視点をもてたと評価することができる。

また、生徒Ｆは元来、自分が思考したことを表記するのが苦手な生徒である。そのため、ワークシートの記述が少なく、学習後のパフォーマンス課題の記述も「おいしかったです」のみであった。しかし、各時間のまとめの中には「やさいをたべようとおもった」（第１時）や「じきゅうりつ100％にしたほうがいいとおもった」（第５時）など、その授業で自分が思考し判断したことを本人なりの表現で記述できたことは成長の一端と言える。

生徒Ｇは第１・２時の授業を欠席していたため、パフォーマンス課題に多角的な視点をもって表現することができなかったが、消費者としての立場で「たべるものはしっかりたべる」（第３時）や「国内品をしっかり買わないと」（第５時）と自分の考えを表現していた。単元の後半では「（食べ物を）なくさないためにがんばっているひとたちがいるのがわかった」（第７時）と生産者の努力の視点も踏まえた表現ができるようになった。

３　検証のまとめ

各時間での問いや単元シート等を工夫することで、生徒は社会的な見方・考え方を働かせて多角的な視点をもって思考し、判断することができた。そのため表２のように、はじめは一言だったパフォーマンス課題に対する記述が、単元の終わりではより具体的に表現できるようになった。

図８は生徒の単元後の振り返りである。これを見ると、単元を通して生徒たちが我が国の食料生産について関心を持ち、最終的に自分の生活や将来の進路などと結び付けて捉えていることがわかる。

以上のことから、社会参加を意識したパフォーマンス課題を設定し、生徒の社会的な見方・考え方が働くような問いの工夫を行うことで、社会的事象を思考・判断し、表現する力が養われたと言える。

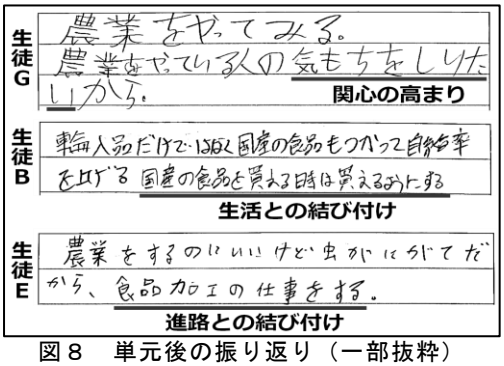

図８　単元後の振り返り（一部抜粋）

Ⅴ　成果と課題

１　成果

(1) 社会参加を意識したパフォーマンス課題を設定することで、生徒が様々な立場や視点をもって自分の生活や将来の進路などと結び付けて、多角的に考えられるようになった。

(2) 毎時間、問いの工夫をしたことで、生徒が社会的な見方・考え方を働かせて社会的事象を比較・関連付け、自分が思考・判断した理由や根拠を示して表現できるようになった。

２　課題

(1) 社会科の授業における生徒の実態把握を進め、特性に応じたルーブリックの設定を検討する必要がある。

(2) 学習に苦手意識があり、積極的に参加できない生徒がいたため、見通しのもてる単元シートや授業展開の仕方をさらに検討する必要がある。

〈参考文献〉

国立教育政策研究所教育課程研究センター　2020　『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【小学校　社会】』　東洋館出版社

澤井陽介・中田正弘　2020　『板書で見る全単元・全時間の授業のすべて 社会 小学校５年』　東洋館出版社

文部科学省　2020　『特別支援学校学習指導要領解説知的障害者教科等編（上）(高等部)』　ジアース教育新社

澤井陽介　2019　『「見方・考え方」を働かせて学ぶ社会科授業モデル ５年』　明治図書

文部科学省　2019　『特別支援学校高等部学習指導要領』　海文堂出版

澤井陽介・廣嶋憲一郎　2018　『小学校社会科学習指導案文例集』　東洋館出版社

市川和也　2018　「特別なニーズのある子供とパフォーマンス評価－発達障害を中心に」　西岡加名恵・石井英真『Ｑ＆Ａでよくわかる！見方・考え方を育てるパフォーマンス評価』　明治図書

文部科学省　2018　『小学校学習指導要領解説　社会編』　日本文教出版

澤井陽介　2017　『授業の見方「主体的・対話的で深い学び」の授業改善』　東洋館出版社

日本社会科教育学会　2012　『新版 社会科教育事典』　ぎょうせい

三藤あさみ・西岡加名恵　2010　『パフォーマンス評価にどう取り組むか―中学校社会科のカリキュラムと授業づくり―』　日本標準

〈参考 Web サイト〉

農林水産省　『ニッポン食べもの力見っけ隊』
https://www.maff.go.jp > zyukyu > zikyu_ritu > panful（最終閲覧 2022 年２月）